
OverSoulWorld

そらのはて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Over Soul World

【Nコード】

N8834A

【作者名】

そらのはて

【あらすじ】

青年はいじめや虐待を受け親から家を追い出される。それは、ある青年にとって当たり前だった日常が崩れてしまう。だが、そこで《自由の者クロウ》という者に誘われOver Soulの道へと行く。（しばらく更新をしません）

ブローグ

制す者 バラ

抗う者 オーム

すべてを知る者 ハカナイ

自由の者 クロウ

世界には四勢力があつた。

世界はこの四勢力で成り立っている。

すなわち、この四勢力でバランスが保っている。

ひとつが無くなれば世界は混沌をおこしバランスは崩れ世界は成り立たなくなってしまう。

だから、世界は執行者という者を作った。

世界に災いをもたらす者を排除する。

それが執行者。

そして今

また一人と狙われていた。

危険人物の候補

あいかわ なつい
相川 夏唯

彼は最近、能力に目覚め自由の者クロウに勧誘され入った危険人物。

そのOverSoulはとても最近目覚めたOverSoulとは

思えず才能としかいいようがない能力だ。

仲間になれば頼もしいが敵になれば怖い存在。

だから今の内に潰していこうと執行者がたった。

第1話

世界の大都市とも言われた産業の都市、南河大通り一街。
そこにある男がいた。

日曜の大通りに
人が多くなる昼頃
今は冬なのにそんなの関係なく人は多い。

今日もぶらぶらと暇潰しに店を知らみ潰しに歩く。

その大通りの中
一人だけが違和感ある者がいた。
古い帽子の黄土色をしたシルクハットのような形を被った
おっさんが立っていた。
冬の季節に合うように帽子と同じ色のコートを着ている。ネクタイ
にヒゲに眼鏡。
どこかのお偉い人のおっさんのような格好だ。

いや、そういう雰囲気があるおっさんだ。

？

何だ、あのおっさん。
こっちに向かって歩いて来やがる。

そして、おっさんは目の前に来る。

おっさんは、オレと目が合うなりいきなり変な事を言う。

「なあ、おまえでいい。おまえの手でオレを消してくれないか？」

「はっ？何言ってるの？」

オレはあまりにも訳が分からないので少しキレる。

ふんっ

と鼻で笑われた。

「何だ、オッサン？」

眼を合わせながら言う。こういう時には眼を見るのが1番だ。真剣なのか、ふざけてるのかは一発で分かる。

・・・深い眼だ。

まるで、すべてを凌駕する如く眼。

これは、マジな眼だ。

ふざけて出るような眼じゃない。

「そうそう。眼を見るんだ。眼は1番感情を読み取りやすく、ごまかしが1番聞かない所だ」

・・・ただ者じゃないな。一般人じゃない。

一体何だ。このおっさんは？

「はっ、何言ってるんのおっさん？」

一応、知らない一般人の振りをする。

「ふふっ、すべてを知るもの、つとえば分かるかね？夏唯くん」

どうやらごまかしは効かないらしい。

それより

「すべてを知る者って言えば・・・ハカナイって言う奴が。何でア
ンタがいるんだ？こんな所に」

「世界が抗う者がお前達を殺すらしい。それを伝えにここまでわざわざ来た。」

なんか皮肉が入ってる言い方だ。

嫌々来たって感じた。

「まあ、後は、ついでにオレも殺してくれたらいいのだが・・・殺
つてくれないかい？」

妙な事を言うな。

「それは、お断りだね。第一、抵抗しない人殺しは勘弁だ」

「そうか・・・なら、いい。後、あの女にも伝えに行かなきゃなら
んし。今死んでも意味がない。いや、でも、死んだらそこで終わり
だし面倒臭い事も省けて楽になるから・・・」

何かボソボソ言い始めたぞ。独り言みたいのが多いおっさんだ。

その辺を通ってる一般人が冷たい目で見てるぞ。

とりあえず、ここで話をするのはまずいのでどこかに移ろうつと言
うと

「大丈夫だ。一般人が話を聞いても理解できない。ただ、おかしな
会話をしている変人がいるってぐらいだ」

・・・嫌だな、それも。

確かに理解は出来ないと思うが理解しようとも思わないか。

「それより、何で、その抗う者がオレを殺しに？」

「まあ、世界がおまえを危険人物として認知されたいらしい」

「・・・オレって危険なの？」

オッサンは不思議な顔をして苦笑いをしながら
ああつと言った

「何で？別にオレ特に悪い事はしてないが」

「そのOver Soulの才能だよ。君のは特に強くなりやすい。
いや、強くなれるからな」

「だからつといて殺すはないだろう？」

「仕方がない。世界の四勢力を驚異にするほどの才能だ。怖がれて
当たり前だ」

・・・それだとある矛盾があるな

「んじゃあ、何でおっさんハカナイがそれを伝えにきたんだ？危険
って教える前に殺した方が警戒されずにやれるだろ」

「うん？まあ仲間に出たらいいなって思ったからな」

「それだけ？」

「他にもあるよ。コピ売ってたら、こちらに被害をださずに済むし
利用だってできる。そんなくだらない事情さ」

「正直に言っな」

「まあ、本当の事だし、人間の心理上、正直に言っの方が信頼され
やすい。すべてを知る者の方針さ」

「氣にくわねえな」

「論理だ。言えば最低な事だと思っが言わなきゃいい事だと思
わる」

「それなら、おっさんは何で、そこまでの事を言っ？」

オレはただ理由が欲しくて聞いた。

「おっさんか・・・一応、陣乃黒岩じんのくろいわという名がある」

またヘンテコ名だな。

Over Soulの能力者は大半名前がおかしいぞ。
オレもだがそこまで、ひどくない。

夏唯と書いて
かいをなついつて言うぐらいのレベルだ。

「ヘンテコだな」

「仕方ない。親がそう名付けたから。」

黒岩のおっさんはそう言うのと右腕にしている時計を見てそろそろ時間
だなっと言う。

「じゃあ、そろそろ時間だから帰らせてもらっよ」

「ああ、じゃあ、またな」

おっさんの背中が見た瞬間ある大事な事を思いだした。

肝心な理由を聞いてねえや。

「黒岩のおっさん理由聞いてないぞ」

オレはそう言う

そう言うとおっさんは左に首を後ろに向けた。

「まあオレもハカナイの長は氣にくわないからな。腹いせに言った
だけだ」

「くだらねえな」

おっさんはまた鼻で笑い

じゃあ、またなつと言

人込みの多い近くのデパートに入った。

・
・
・

とりあえず、仲間の勧誘しなきゃなんねえな。
それから、いろいろ考えるか。

浮気される者

朝の8時

長い大通り。

南河と繋がる一直線の先の北河商店の通りに
オレはいる。

季節は冬でも人込みが多く、スクランブル交差点ではまるで関ヶ原
の大戦をするかのように人がうざたかった。

人が多いのは好きじゃない。

オレはスクランブル交差点の少し先にいる自分の彼女を見る。

彼女の浮気が気になり

今、尾行をしている。

しばらくすると

彼女は駅前の犬の銅像まえで待ち合わせをしているように見えた。

オレは喫茶店のオープンカフェに座っている。あそこからじゃオレ
だと気づかないだろう。

他人から見れば、まるで、ストーカーしているんじゃないと思う。

5分ぐらい経つと

あるちゃらちやらした男が彼女に話かける。

男は眉を剃っており髪は金髪でアクセサリーをじゃらじゃらとつけて
いて黄色っぽい服を着ていた。

「待った？」

「うん、めっちゃ待ったよ。」

彼女が返事するって言う事はナンパじゃない。嫌な予感がしてきた。

「すまん、すまん。少し緊張してどの服着ていけばいいか悩んでたから」

男は頭の後をかきながら言う。

・・・それで、悩みに悩んでその目立つ服かよ。
センスがないと思う。

「へえー、すつごくその服似合ってるよ」

彼女は自信満々に言う。

ええと。僕、君の彼氏として恥ずかしいよ。そんなファッションセンスがないなんて。本当、ダサいのを見て褒めるなんて見るに堪えなかった。

「ホント似合ってる?」

いや、似合ってないから。と心の中で言う。

「うん、似合ってるよ。私の彼氏と大違い。彼、全然ファッションセンスないから」

何だろう。

頭の中が怒りで頭が真っ白になっていく。

代わりに心の中で怒りを叫ぶ。

てんめえ、殺してやる。

いないからって言いたい事いいやがって。

あのクソ女

浮気しやがって

何が浮気してないっだ。

普通にしやがって。

やはり、甘かった。

もう、少し問い詰めるべきだった。

「マジ？彼、ちょーダサイの？」

彼はけらけらと笑っていた。自分の事を知らない他人が陰口を言われるとどれだけムカつくのか知った。

「うん、めっちゃダサイよ。だから一緒に歩くのも恥ずかしくなるの」

彼女もけらけらと笑いながら言う。

そんな笑い方今まで見た事がなかった。

「ははっそんな奴なら別れたら？」

・・・オレの事知らないくせによく言えるな。

「まだ別れないって。いい金ヅルなんだから」

おまえ・・・オレの事そう思っていたのかよ。

言いたい事言いやがって、怒りのボルテージが少しずつ上がっている事が分かった。

「へえーじゃあ、金だけ取って捨てるの？」

男はまだ、けらけらと笑っている。

この男は1番聞きたくないことを聞きやがって。

「うん、捨てるに決まってるじゃない。あんなダサ男」

彼女はそれは当たり前みたいにつみにきっぱりと答えた。

プチンツと理性が弾き飛んだ感じがした。

言葉にでない思いが頭によぎる。

殺してやる。

絶対殺す。

死ね。

両方とも死ね。

あいつらが人気ない所で移動をして、いちゃつこうとした時にはもう、体が勝手に動いていた。

暴走する者

気づいたら、

釣りで使うナイフで二人とも殺していた。

何をしたのかあまり覚えていない。

ここが、どこなのかも分からない。無機質なコンクリートで狭い路地。不良達が暗号か絵なの分からないスプレーで文字が書かれていた。

そして、死体が二つ転がってるだけ。

男は背中の右肩甲骨にきから血が流れ俯せに倒れてる。

女は首から血がでていて、首は不自然な形になっている。曲がりすぎて気味が悪かった。

少なくとも女は確実に死んでいる。けい動脈を確実に深く切ってるから。

どうやら、男はまだ生きてるみたいだ。

まだ、体が微かだか動いている。

「うう、くそ、てめえ」

男の喘ぎ声が聞こえる。

「うるせえ奴だ」

自分が出した事さえ分からないぐらい興奮していた。

オレはそう言つと、男の背中をにまたがり、何度も何度もぶっさしていた。

体が勝手に動く。

もう、理性が効かない。

我が本能のままに動く。

「おー、すげえな。人殺してやがるわ」

！？

誰だ？

いきなり後ろから声が聞こえた。

今まで人の気配とかなかったのに声がした途端に気配がでてきた。

「誰だ？てめえは」

そういつて後ろを振り向き
ガンをつける。

どうやら、声がした奴は男だ。黒い服に黒いジャケットにジーンズを着ている。大学生みたいな感じの奴だ。

二人は

睨み合う。

黒い男は褒めるように

「いい眼だ。まさしく、人殺しの眼だ。ん？黒岩のおっさんみたいな事喋ってるな」

？何言ってるんだコイツ

「何だ。おまえは？」

思った事をそのまま言った。

「人を殺すのは初めてか？」

「ただ、またスルーされた。」

「どうやら、人の話を聞かないタイプらしい。苦手だ。」

「だがオレは興奮しているせいだ」

「おいっオレの質問に答えろ？」

「と怒っていた。」

「ふーむ。まあ一時的なバーサーカー現象だな。おまえ、人殺しても何も思わないだろ？」

「とことんオレの話を聞きたくないらしい。」

「てめえも殺してやる」

「我が本能のまま動く。」

「まあ、落ち着け。単刀直入に言うとおまえを仲間にしにきた」

「あ？訳わかんねえよ」

「おまえは能力者だ」

「はあっ？」

「あまりにも訳が分からなく知らない内に怒りがきた。」

「死ねっ！」

そして言葉となり体が動いた。

「やつぱり、まだバーサーカ現象が続いてるな。まあ、いい」

相手は鼻で笑い

「来いっ！」

つと静かな声で言い構えた。奇妙な構え方だ。空手のように手を真っ直ぐに伸ばしボクシングのような構えだ。

中々、攻撃してこないの为先手必勝に攻める。

どちらかというと、オレはカウンターの方が得意なのだが興奮していたので攻めてしまった。

オレは自分の左腕でまず相手の防御する右腕にフェイントを入れる。当てるのではなく外す。すると自然に相手は反撃をする。

右腕でのカウンター！

平手のように掌低で攻撃したが関係ない。

オレはしゃがみ込んで回避し

カエルアッパーのように相手の首、目掛けてナイフを持った右手でアッパーする。

大半の奴ならこれで仕留められる。

だが、目の前の光景はにわか信じ難い光景になっていた。

オレの右腕が止まっている。

手応えはない。

これは

右腕で・・・生身の手で
ナイフの刃が止められてる。

・・・止められたのか？
オレの最速の一撃を・・・

暴走する者2

・・・？

あれっ

最速の一撃？

大半の奴？

あれっ？

オレ人殺してないのに何で知ってるんだ。

さっきまでの記憶がスッポリ抜けた感じだ。
思いだそうにもド忘れた感じで・・・。

困惑する頭。

今まで何をしていたのか分からない。

「うーん、落ち着いたか？」

黒ジャケットの男が心配そうに聞いてきた。

「ってか誰だコイツ？」

とりあえず、心配はしているようだから悪い人じゃなさそう？

「あ、ああ。オレ何してるんだ？」

「まあ、一々長い話するのは面倒臭いけど話をまとめるからちょっと待てよ」

待てって何で待たなきゃならないの？

黒ジャケットの男は上を見ながら考えている様子だった。オレもつられて上を見る。

狭い空間から空が見えた。コンクリートの狭い路地。壁と壁が狭く人三人横に並んで通れるくらいだった。ゴミは散らかり嫌な臭いがした。

空は少し曇り初めて雪が降りそうな感じだ。

さっきまで自分が何をしたのか分からない。

何をしていたのだろう？そう思い下を見てみると

黒ジャケットの背中の方に

死体が二人転がっていた。

「何これ？」

一瞬、マネキンか何かの映画とかで使う物だと思ったけど……これは明らかに死体だ。

異臭がする。血の臭いがする。さっきの嫌な臭いはこれなのか？だが不思議と冷静になれた。

「おまえが殺ったのか？」

低いトーンで言う。死体に目をやって言う。

冷静になりすぎて逆に自分が怖くなった。

「んにゃ、おまえが殺ったぞ」

黒ジャケットの男はそれが当たり前かのように答えた。

「は？オレが……か」

なぜだろう。確かに自分が殺ったような気がしてならなかった。しかも、死体をよく見るとそれは自分の彼女だった。だが、それを見るとせいせいした感じがした。

「自分が冷静になりすぎて、怖いだろう？」

ジャケットの男はポケットに手を突っ込んで言う。

「ああ、」

気持ちのまま答える。

座り込んで左脚は体育座り右脚はあぐらのようにして壁に寄り掛かって座った。

「それより、おまえは何者だ？」

「自由の者クロウの夏唯っていう者だ。おまえが暴走していたのでオレが止めてやった」

「オレが暴走？」

「そつ、大変だったぞ」

「うつ？なんか気持ち悪い・・・」

いきなり吐き気がした。

「Over Soulだ。おまえの体に像の魂をぶち込んだ。たぶん、その時の反動だろう」

黒ジャケットの男も座る

オレと同じように壁に寄り掛かった。
目が合う。

よく見ると幼い感じが残る高校生のような顔だ。
大人になりかけの顔だ。

髪は長めでジャニーズのように金髪でワックスをかけていた。

「Over Soul? 像の魂?」

あまりにも聞いた事がない言葉だった。

「うしつ、まとめて話すからよく聞いてくれ」

無言で頷く。

「世界には四勢力よって成り立っている事は知ってるよな?」

「ああ、よくニュースでやってるけどあまり詳しい事まではしてないな」

「まあ当たり前だ。そこでOver Soulが関わる訳だから。Over Soulというのは、魂を自分の体に入れて一時的に身体能力を上げるものでテレビではいわゆる超能力って言われる。いきなり、一般人に言っても信じないけど今なら実感するだろ?」

「ああ、嫌になるほど実感がする。こんなにも冷静になれるなんて」

確かに人の死体を見て冷静になれるなんて異常にも程があるだろ。
あつそれより速くこの場から移動した方がいいんじゃない? 人がこの場

面見たら明らかにオレ達が殺したように見える。オレはそう思い

「それより、どこか移動したほうがいいじゃないのか？」
つと云うが

「大丈夫だ。来ないように結界みたいのをしてきた。」

「結界？」

「魂で雰囲気を作った。あるだろ？こういう所、不気味で入りたくないって夜の学校とかいい例だ。例外に入ってくる馬鹿がいるけどな」

「ふーん、そんな事もできるのか。それよりも、オレは本当に人を殺したのか？」

「ああ、一時的なバーサーカー現象って言ってな自分の本能が理性に負けて暴走する現象。その間は記憶には残りにくく大半の奴がOver Soulを無意識にしてる。」

黒ジャケットの男は冷静に言ってくれた。まるで、今の自分のように。

「そうか。なら、オレは犯罪者だな。自首するか」

オレはもう自分の冷静さに怖くなり警察に入る事にしようと思ったが、つい口にてたのが災いの元だった。

「いや、ダメだ。おまえはオレの所に来て仲間にならなきゃならない。ってかならせないとオレが怒られる」

「はっ、オレは殺人者なんだぞ？仲間になっても捕まるのがオチだ」
悪魔でも冷静に答えた。心は感情的な感じなのに冷静になってしま
う。

「いやーそれがな捕まらないんだよ。それに今、警察言っても多分
おまえ死刑にされるぞ？」

！？

「何で!？」

「Over Soul ってのは厄介でな大半の殺人したOver So
ul の能力者は仲間になるか警察で死刑になるかのどっちかなの。
仲間になれば捕まらないし、罪とか関係なくなるしね。まあ、四
勢力のどこからにも勧誘がなかったら死刑決定だけどね」
ア然とした。

「おかしい。今の日本の法律は余程社会に更新できないと判断した
時に死刑になるはずだ。死刑は極まれのケースだ」

「その極まれのケースがOver Soul の能力者の死刑だ」
不思議とその黒ジャケットの言ってる事が理解できた。分からなか
ったパズルが勝手に出来上がっていくような感覚だった。
Over Soul は、つまり一般人からすれば超能力者な訳だから
今までの死刑ニュースの大半は超能力者という。たしかに
それなら、納得出来るし矛盾がないから。

「そんな、どちらにしても選択できないじゃないか。刑務所で償っても死ぬなら元もない」

オレは夢があるのに。

死にたくはない。

理不尽だ。

不幸だ。

頭にそんな言葉がよぎる。

「人を殺したんだ。どっち選ぼうが償う事は出来ない。人の死は一生背負うしかないんだ」

黒ジャケットの男は知ってるかのように言う。

「そんな・・・どうすればいいんだ。オレは？」

「とりあえず、人の死を背負うんだ。潰されないように気をしっかり持つんだ」

涙はでない。悲しみはあるのに冷静になれる。

「オレは・・・どうすれば？」

頭がどつしりと乗っかかる何かがあった。

重い罪悪感が乗っかかっていた。

人を殺したという罪悪感

「とりあえず、オレの家に来い。今決めなくてもいいから落ち着いてゆっくり決めてくれ」

・・・信頼していいのだろうか？

「どつちにしろ、おまえが何言おうが連れていくぞ」
そう言うと男はオレの頭に手の平を向ける。

「少し痛いけど我慢してね」

すると、眩しい青色の燃える玉が勢いよくオレの頭に向かって飛んできた。

危ないっと思ひ腕で防御したが
ふわっという感じで体が倒れる。あれっ？意識が少しずつ消えていく。

そして、目の前にある無機質なコンクリートの景色が霞み暗闇に落ちた。

第2話

無機質コンクリートの上で死体がふたつ。生きてる人が二人。その内一人は睡眠状態。

死体は・・・仕方ない。

また、世界の野望の犠牲者になったのだから。本当にくだらない。

世界は何をしたいのだろうか？

Over Soul・・・

本当、神はくだらないものを地上に産みやがって。こんながあるから世界はおかしくなったんだ。

今もOver Soulで人は傷つき殺され悲しむ。

逆に喜ぶ者、楽しむ者もいる。

けどそれはごく一部の人間だ。大半の人は苦しみもがいて、必死に幸せの希望を探している。

世界にOver Soulが消えれば世界は無力になるのに・・・でも、無力なれば世界は成り立たなくなる、か。

『世界は4勢力で成り立ってる。

一つの勢力が無くなれば世界はバランスを失い混沌を導き出し終わりを告げるだろう』

何かの本とか講演でよく言ってた言葉だ。もう、何度も嫌になるほど聞いた。

くだらない、と思う。

はあ、ため息をつき
携帯を開き時間を見る。

10時24分か。

速くしないと長に怒られるな。勧誘はスピードが大事だからな。いかに、能力者を納得させて勢力の戦力するかだ。他にもライバルがいて勧誘しにくる奴がいるからな。うしっ、とりあえず現状、確認。

死体は誰かが見つけて警察に連絡がいくだろう。マスコミにはうちのご自慢の権力で隠蔽されて嘘の情報が流れるだろう。

親の人にとっては酷な事だろうけど仕方がない。

世界のくだらない野望のせいだ。

オレはどうする事も出来ない。

抗っても何も残らず

死ぬだけだから。

ふー

ため息をついてさっきまでの思考を飛ばす。

さあて、まず、コイツはどうしようかな？

まずは、どうやって運ぶかだ。

はあーまったく。寝かせるよりか何とか説得して連れて行った方が利口だったと思ったのだが口下手だからな。

つい面倒くさがってOver Soul使ってしまった。

幸いにも家が近いのはいいんだがアパートなんだよな。

これが、また。

誰か人に見られた、もうそこでジ、エンドだ。

気を失っている人間をアパートの中

つまり、自分の部屋に入れるとかは

変態か、犯罪者に間違われて

そして警察に電話が来て、自由の者クロウの権力で何とか、かき消してはくれるがその分はオレが怒られる訳で・・・

あー怒られたくはない。

ってかクロウの長が怖すぎるんだよ。

しかも、オレはまだ、新人だし

軽く10発は殴られるよな。

ベテランのOver Soulの能力者でも、しくって警察に捕まった時も

5、6発は殴られたって聞いた。

ベテランいわく、

あれは、ヤバイ、痛い。Over Soul無しなのにすごい攻撃力だ。

って言うぐらいだからな。

さて、運ぶか。

オレは背負いこみジャケットで覆い隠しながら運ぶ。

まあ、はたから見たらまさか、人運んでいるとは思えないだろうな。足とか手出てるけど、誰も見たって声はかけないだろうな。変人をわざわざ自分から話しかける奴はいないからな。

その分、目立つから極力の速さで事を済まさないといけないな。

抗う者

オレは無機質なコンクリート通りからの北河大通りの出口へ行こうとした。

だが

！！？

突如、電撃で撃たれたかのように緊張した。

誰がいる。

Over Soulの能力者の気配がする。隠しているのか弱いのか分からないが気配が小さい。

出口の先に誰がいる。

こちらを監視しているかのようにだ。

出口先、角の壁に張り付いているのだろう。

時々、ちらつと頭が見える。

誘っているのか、未熟なのか

たぶん後者だな。

気配的には

出てきた瞬間に殺るって感じなのだろうか？

まあ、結界を貼ってそこにいるって事はOver Soulの能力者だろうな。

ただの馬鹿じゃないと思うが。

男？

女？

んー出来たら女で若いのがいい。決して嫌らしい考えじゃなく、ただ、女で若いのは弱い。

男と比べてOver Soulの魂の好き嫌いが激しい。

どうしても、女はセンスがいいものを選ぶとする。逆に男はあまり気にせず単に強いものを選ぶとする。

まあ、最終的には性格で作用されただけだな。

あと、若いならOver SoulのOver Timeいわゆる時間が短いので長期戦持ち込めば余裕で勝てる。

年寄りだったらOver Timeは長いがその分肉弾戦が弱くなっていく。

さあて、どっちだ？

とりあえず、この男を仰向けに置いて、・・・

男は幸せそうな顔で眠ってる。

よく寝てるなあ、マジックペンで顔に何か書こうかな？

そんな事よりも

よしっ！

まずは先手必勝だな。

死体になってる男の服をびりびりと無理矢理剥がし出口の先に投げる。

ぶわつと風の音がして出口の先までいく。

すると、案の定、手が伸びてきて服が電気みたいな物で燃えて消しカスになった。

黒岩のおっさんに助けられたな。警戒しててよかった。

本当に危なかった。もし、この男を抱えたままいったら電気で気絶させられその後拷問とかされて殺されたのだろうな。

何が4勢力で成り立ってるんだ。一つの勢力潰す気まんまんじゃねえか。

「え、何これ罠？」

女みたいな声が聞こえる。

うしっ、相手は混乱してる。素早く伸びているを握り一本背負いで叩く。

「はあああっ!!」

一喝を入れる。

「ぐうっ!!」

やはり、女だった。

女は制服を着ていて長いロングヘアの金髪だった。しかも、女子高生ですか。スカートがめくれて中がまる見えだ。

女は苦しみもがいている。当たり前だ。
コンクリートの上に叩きつけられたんだ。骨の2、3本あばらが折れてもおかしくない。

それなのに、女は手について素早く立ち上がろうとする。

やばっ！せっかくのチャンス逃すか。

すぐにマウントポジション女の上にまたがった。
腕を抑えて素早くOver Soulをぶち込む。

「うぐうつ！」

また、喘ぎ声が響く。

はあー危なかった。
眠ったか？

女は目で睨みくそつとつぶやく。

「てめえ、おかしな事したら殺す」

そう言つと女は眠った。

おおっ怖い。

いきなり初対面でそれかよ。気が強い女だ。

さて、誰だろうねこの人は？

黒岩のおっさんの言った抗う者の執行者か？
握っている腕を外し

持ち物を探る。

Over Soul の能力者なら会員証持ってるだろう。弱かったからたぶん必ず持つてるはずだ。

弱い者は長に覚えられないからな。

・・・何も持ってねえな。

って事は中だ。

仕方ない。やりたくはないが制服の上着をとる。

紫の・・・

色気づきやがってブラジャーの紐の所に会員証があった。

キャッシュカードみたいな素材に大きさの

灰色のカードにねずみ色のレイアウト。

色からすれば

んつとやっぱ抗う者だ。

んで名前が霧島、詩音？

珍しいな。名前が普通な気がする。

でも、ちよつと変わってるな。もっと田中太郎みたいにありきたな名前はないのか？

にして強いな、あばら折れても立ち上がるなんて

余程訓練してないと立ち上がれないはずだ。

自分の技が効いてないのか腹を触つみる。

やっぱり折れてるな。

痛々しいな。

確かめるために徐々に手が上になっていく。

少し膨らんでいる胸を

・・・やめとくか。

寝てる女にそれはないだろう。

起きたらおつかないしな。

それにしても、執行者にしては弱ったな。

気配隠すのもド下手だ。

たぶん、新人のはずだ。

初めて任務でもしたのだろう。

・・・。

こっこのは、たぶんベテランの能力者が一緒に行動してるはずだが・

「やっぱりやられたか。自分から言っというてこのザマだ。おいつ、
てめえやつてくれるじゃねえか？」

あーあ、予感的中。

出口先で男らしき人がいた。ニット帽に白パーカーの服にズボン
普通の黒だ。見た感じ20歳前半で揉み上げがないから多分髪型は
坊主だ。

「抗う者か？」

分かりきってる事だが一応聞いてみる。もしかしたら、違う奴かも
しれないし。

「だとしたら？」

「いやあー見逃してくんないかなって？」

「あほか。仲間が倒れて見過ごす奴がいるか」

そう言うところ坊主男は構えた。戦闘体制だ。軽く腕を上げて拳を軽く握る。まさしくボクシングの構えをしていた。

強い。

雰囲気だけで分かる。

Over Soul なしじゃやれる。気配的にもまさしく Over Soul のベテランだ。

やばいな。

今日は勧誘だけだろうと思ったから Over Soul の魂は本部に預けてきた。

きびしい闘いになりそうだ。

いや、確実にやられるな。死ぬ

その言葉が頭の中で浮かぶ。

交渉は出来ないかと男の目を見るがやる気満々の目をしている。

はあー、さらさら、交渉には応じてはくれる気はないようだ。闘うしかないのか？

「なあ、頼む。この女返してやるから見逃してくんないかな？」

「ダメだ。どちらにしる返しても返さなくても、おまえを殺すから」

「なあ、何でオレは殺されないといけないんだ？」

「さあ？任務だ。とりあえず、殺してこいしか聞いてないからな」

「あーあ、そうかよ」

まあ、男からの情報からすればオレの事は知らないらしい。それだけで、充分だ。勝てる要素。勝率が上がるからな。まさか、Over Soulをぶち込む事が出来るとは思わないだろうからな。

「おまえ、相川 夏唯か？」

・・・なに？

「知ってるのか？オレの事」

「知ってるも何も、さつきOver Soulぶち込むとこ見てたしね。Over Soulをぶち込む事が出来る奴といえば、有名になった相川 夏唯ぐらいだからな」

くそっ 誤算だ。

どうやら、オレはとてつもなく有名人になってるらしい。

「なるほど。じゃあ、コイツこの女をおとりにして様子を見たって事か。最低だな」

隙を作るために話をする。

「おおっと、勘違いはしないでくれ。この女が私一人で出来るつたから仕方なく様子見てただけだ」

「どっちにしろ、利用してたんだろ？」

相手の怒りを買って隙を作ろうと思ったが・・・
！

男の目を見る。

・・・なんつー男だ。

すごい殺気だ。

自分が殺されるビジョンが浮かんでくる。

「ああ、そうだ」

男はただ、一言を言ったただけなのに凄い一喝を感じた。
たった、それだけでオレの余裕がなくなった。
足ががくがくと震えてしまう。

「利用できるもんはすべて利用するからな」

腹黒い。

まさしく、そんなオーラを感じた。

頭が真っ白になっていくのを感じる。

びびるなオレ

奴は確かに強い。

いや、知らないから怖いんだ。

いや、でも、何だ。

このまがましい狂喜は？怖い。

やはり怖い。

しかも、それだけじゃないんだ。

自分が殺される最悪なビジョンしか出てこない。

今までは勝てるビジョンとかでてきたのに。

「何だ？さっきから黙って」

また、殺気がくる。

やばい、

くそ、すっかりしろ。オレ・・・逃げるか？

ダメだ。コイツを置いていけねえよ。

どちらにしろ逃げられない。

この狭い通りじゃ逃げられない。後は行き止まりの壁。前は狂喜に満ちている敵。

「こないなら、こっちから行くぞ！」

くそ、きやがった。くるんじゃねえよっと思うが、回避する事に専念する。

反撃しようにも恐怖で恐ろしくなってできなくなっていた。

相手の右拳が目の前にくる。

右にかわす

頭の左横に拳がきながら、それを見る

が拳の回りに炎がきれいな円を作りながら飛び散る。

！

両腕でガードをするが

物凄い激痛がくる。

「かはっ」

腕が溶けている。

やばい下がれ。

全力で下がれ。

悩の中ではそれしか意識をしない。

余った左拳が目の前にくる。限界まで後に背中の骨が折れるかと思うぐらいのけ反る。

よしっ、目の前で拳が止まった。

だが、

炎が円上に飛び散る。

危ない、体の下半身部分に当たる。

のけ反りの勢いを借りながら地面に手をつき
ばく転を高速でしながら下がる。

激痛が襲う。

意識を持っていかれそうだが、
2回3回と続ける。

さ、下がれた。距離を作れた。

あぶねえ

こんなの下半身とかに当たったらたまったもんじゃねえぞ。

オレの両腕肘から手首の間には物凄い火傷をしている。しかも、
3分の1ぐらい溶けてるせいか腕がもう使い物にならなくなっていた。

当たり前だが、もうOver Soulをぶち込む事は出来なくなっていた。

・・・意識がぐらつく。

やばい、激痛で気絶しそうだ。

血はでていない。

さっきの炎で皮膚が固まっているのだろう。

「さすが天才と言われるだけの強さはある。反射神経が並じゃないな」

バカヤロウ。かわすだけで精一杯だ。

「まあ、もう勝負ありだな。その腕じゃOver Soulぶち込めねえもんな？」

凶星だ。返事はしない。

確かに、絶望的だ。

勝てる要素が何一つない。たった一瞬の油断。自分の未熟さえゆえの恐怖。

たった、その一瞬の過ちでオレは勝てる要素を無くした。

『勝負は一瞬だ。一瞬で勝てたり負けたりする』

言葉が走馬灯のように駆ける。

訓練していた時の教官がよく言ってた言葉だ。

『あんたみたいな子産まなきゃよかった』

映像が浮かび上がる。

子供の頃、虐待をした母親に言われた言葉だ。

・・・やばい、オレ死ぬのか？

走馬灯が次々と浮かんでくる。

「がっかりだ。やはり、天才と言われてもただの小さい子供なんだよな。」

今、楽にしてやる

男はそう言つとオレの視界から消えて

「えっ」

と思い

気づいたらオレのあごの真下にもう来ていて

腹に物凄い感覚に襲われた。

最初はただ、殴られたかと思つたが

腹から勢いよく血が吹き飛ぶ。

刺された？

いや、違う。

溶かされたんだ。

熱が腹から伝ってくる。

そして、激痛が襲いくる。体が自然と後に倒れていく。凄いスロー

モーションに感じた。

景色がゆっくり、ゆっくりと流れる。

地面に着く。不思議と痛みはなかった。それより、腹のほうが多く、腕の痛みとか分からなくなっていた。

狂喜

くそ・・・ふざけるなよ

こんなところで死ぬのかオレ？

頭の中で恐怖で満ち溢れてくる。

そして、狂喜がくるのを実感してきた。

やばい、バーサーカー現象なのか？

いや、Over Soulはしてない。

じゃあ、なんだこれ？

頭の中がおぞましく

破壊の衝動が来た。

暗い水に浸かっているような不思議な感覚に捕われる。
浮いている。浮遊してる。そんな気分だった。

暗い、回りが暗い。

暗くて何も見えない。

光がない。

何もない。

何も触れられない。

そうだ、まさしくこれは

オレの心の世界だ。

光という希望はなく、ただ暗闇の中で苦しみもがいて誰も助けはくれなかった。

小さい頃、まだ、10歳にも満たない時にだ。

『虐待、いじめ』

それが当たり前の日常になってからは
オレという理性は崩壊の一途を辿っていた。

壊れていく。

もう、自分で分かっていた、自分が自分じゃなくなる事が。

そして、理性が壊れた時には
もう、遅かった。

自分の母親を殺した。
実の母親を殺していた。

オレを殴り蹴り、熱湯100度のお湯をかけたり
汚物を無理矢理、口に押しこまされ飲まされたりした母親だ。
いい思い出はない。

小さい頃からずっとされてきたんだ。
死ぬかと何回も思った。

そして

深夜、オレを虐待して気がすんだのか
母親は眠った。

母親が眠っていた頃に、台所から包丁を持ちだす。

そして、眠っている二階のへの階段を上る。

部屋を開ける。

母親はすやすやと眠っていた。

殺す

もう、頭の中ではそれしか浮かんでいなかった。

どうやって殺せるかは学校で見たテレビで知っていた。

何かのアニメだ。感動ものの何かだったが覚えていないが。

グサリと胸を刺す。

「ぐっ!!?」

母の苦しむ声が聞こえた。

いきなり、母が包丁を手で抑えるが力はなかった。オレはその手を振り払い

また、刺す。

母親は喘ぎ声をだすが

何度も何度も繰り返し刺す。

ぐさり、ぐさり

もう、音はそれしか聞こえない。

何も感じなかった。

罪悪感?

後悔?

そんなものは、なかった。

ただ、快感と興奮が体の中でうずいていた。

それからだ。

オレの世界がさらに一層と暗くなり、ある住人が住むようになった。悪魔のような形相に。ピエロみたいな性格。まさしく、オレ自身の狂喜が一人の人となっていた。

「よう、また会ったな。あの日以来かな？」

暗闇の中で問いかける声

オレと同じ声。

姿、形は見えない。

もしかしたら、そんなもの、ないのかもしれない。

「また、てめえに会うとはな」

「どうだ、あれから？何か変わったかい？」

「ああ、おまえがOver Soulなんてくれたおかげで人生が180度変わったぞ」

「そうか、それはめでたいな。でも、それなのに、なんで君は今死にそうなんだい？」

「.....」

「恐怖に負けたんだろ？」

「.....」

「恐怖に負けないように君は人を殺した。実の母親を殺した。そして、また同じ恐怖がきても大丈夫ように。だが、君は思いだしたんだ。自分と同じ狂喜を持つ人間がいたから」

「.....」

「恐怖はちよつとやさつとじゃ無くならない。理性を飛ばして恐怖を無くさせてあげようか？」

「いやだ、なんでお前ごときに理性をささげなきゃならない？」

「そうしなければ、君死ぬよ？もう、悩が死ぬための準備についている。死ぬのは怖いだろう？だが、狂喜に満ちる事で死ぬ事は無くなる」

「.....っ！」

「分かつてる。分かつてる。君は僕。僕は君。君が僕を産んだのだから。怖い事ぐらい承知だ」

「さあ、理性なんて飛ばしちやいなよ」

狂喜2

暗闇の中で、声が聞こえる。

「さて、コイツどうしよかな？寝てるみたいだし。まあ、連れていけばどうにかなるっか」

坊主男の声だ。

体の感覚が少しずつ戻ってくる感じがする。

目を開ける。光が入ってくる。コンクリートの地平線が見えた。どうやら、まだ無機質なコンクリートの上にいる。体はまだ、少ししか動かない。ぴくぴくと動く。

時間にして10秒ぐらいたつと

勝手に体が

立ち上がった。

頭がふらふらと立ちくらみをする。

両腕の火傷、溶けている腹が全くなって言うほど痛みがなかった。

「！？何だ、こいつ？生きてるのか。さすが天才ってか？これじゃただのゾンビだな」

そついうと男はオレを殴ってきた。

不思議と殴ってくるコースが分かる。

すかさず、右で殴る拳を左手で押さえこむ。

えっ？体が勝手に動いてる。自分でもびっくりするほど体が的確に動く。

「何止められた？だが、おまえの手貰ったぞ！」

・・・。

「なに！？Over Soulが使えない？」

オーバソウルヲブチコメ

そんな言葉が頭に過ぎり言う通りにする。

左手から相手の右拳にOver Soulの魂をぶち込んだ。
ぶち込んだ途端、坊主男の口から血が出る。

「がっ、なに？一体どうなっているんだ・・・」

「ははははははあ」

自分は全くだす気がない笑い声が聞こえる。

出したつもりはないが

それは自分の声だった。

「くはっー楽しい、楽しいぞ」

自分に自分が啞然とする。誰だ。コイツと思うほど変わっていた。

坊主男は口に溜まった血を吐き出した。血が地面にたまる。その血を見るとなぜか興奮する。

「イイ血だ。ゾクゾする」

「おまえ、もしかして、狂喜に魂を売ったのか？」

「ああ、おまえだって持つてるだろう？」

自分が喋ってる感覚がしないのに喋っている。

「馬鹿だ、おまえは。狂喜の魂は一度受け入れたら死ぬまで狂い苦しみがー死ぬぞ？」

「うるせえな。こいつが受け入れたんだ。恐怖に負けたんだ」

「馬鹿だ、馬鹿だ」

坊主男は信じられないという形相の顔をしている。

「知るかよ。おまえだって持つてるくせに」

死ねよ

そう言うつと坊主男の顔は恐怖に満ちやけくそになって

「うあああああー」

と叫びながら接近してきた。

「よわいなー、よわすぎて楽しくねえよ」

体が勝手に動く。その最小限の動きは自分でもびっくりするほど俊敏で確実に殴り殺す。

頭を殴り相手が怯む。

あごを叩き上げて

押し倒す。

そして、股がり掌底で鼻の骨を折る。

簡単に難しい事を確実にした。

「ああああー」

痛みに苦しみもがく坊主男。

「うつうつー」

「うるせえな、人が来るだろ？」

おいおい、何だよこれ？オレなのか。ありえない。

楽しんです。人をいたぶる事で楽しんです。おかしい。狂い喜んで
いやがる。

まさに狂喜。

ああ、そうかオレ狂喜に魂を売ったんだな。理性を捧げたんだよな。

二重人格。いや、違う。

これもひとつの感情だ。

理性がなくなり我が本能のまま動く。

クロウの長

眩しい。光が目に入ってくる。

上半身だけ起き上がり

周りを見渡す。

家具、メタルラックの本棚にテレビ、テーブルは食べるのこしの菓子や飲み終えた缶がある。

黒いカーペットにこたつ。これってオレのアパートだ。

ドアが開く。

「よう、起きたか？」

ドアから出てきた者は
黒いスーツに老けた顔。

手には似合わない鍋や皿をのせたおぼんを持っている。そこには、
実年齢45のクロウの長がいた。

「なんで、長がいるんですか？」

「おまえを助けたからだ」

・・・ああ、そうだ。

オレ狂喜に魂を売ったんだな。

「そうか、オレ長に助けてもらったのか」

「ああ、これで二回目だ」

長はそう言つと予め置いていたコーヒーを飲む。
口にタバコを加え火をつける。

「ふうー」

「あの、長。あれからオレどうなつたんですか？」

タバコを口から離す。

「まず、狂喜で暴走していたおまえを抑えて、その後勧誘ターゲットの能力者を連れていきどこか近くの家がないかと思っておまえの家に連れてきた」

簡単、簡潔に教えてくれた。

「長一人で？」

「ああ、そうだ。恥ずかしかったぞ。マスコミ、警察抑えこむのにも金がかかった」

「そうですか。すみません」

頭を下げる。

「まったく、天才とか言われて浮かれたか知らんが狂喜に理性を捧げるな。あれは危なすぎる。いくら自分の魂が強くても唯一自分の弱さを知ってるものだ。今後、二度と使うな」

長は感情的にはならず、ただ冷静に叱った。

・・・無言になる。

何も話せなかった。

謝っても意味がなかった。それに長はすぐ謝る人間が気に入らないと言っていたものだから。

「天才、相川 夏唯。狂喜を扱う事を可能にし唯一のOverSoulを相手体内に入れ込む事が出来る者か」

長はいきなり話し始めた。

「おまえの寿命減ってたぞ」

！

長はいきなり衝撃の事実を教えてくれた。

「長！それ本当ですか？」

嫌な予感がする。

「20年減っていた。仕方ない。無理矢理、狂喜の状態を抑えたかな」

ということは

魂寿命が117年だったから40年分の狂喜に抑えこんだ分と自分

の年齢17にOver Soulに10、使ったからえーと単純調度に残り50年しかない。

「キツイですね」

「ああ、自分で抑え込んでくれば10年は節約できたがあの状態じゃ被害が出ると判断したからな」

「あと、50年か。無駄に使えないな」

「それじゃあオレはもう帰るからな。まさか今日起きるとは思わなかったしな」

「すいません、わざわざここまで運んでくれたり食事など手間かけてしましまして」

「まあ、いいさ。オレだって暇だしな。それに助けたのも偶然だ。陣乃に会って帰宅する時に偶然おまえを見つけたからな」

『陣乃』

何か聞いた事があるような？

「それじゃあ、失礼する」

「はい」

ああー黒岩のおっさんだ。

「ああ、後、勧誘ターゲットの奴リビングのソファーに寝てるから。ひどく精神的に痛んでるから気使ってやれよ」

「はい」

長は背中を向けて手で返事をした。

夢の中

何だ？ここは。

真っ白だ。

白すぎて自分がどこに立ってるか分からない錯覚におちいる。

白い。ただの白じゃない。触れられない白。

手を出してもそれは通り抜けるかのように触れられない。
まるで雲、霧のようだ。

「儚い命未来は断たれ何を望む？」

白い霧の中

声が聞こえた。

「誰だ、おまえは？」

「冷霧^{れいき}だ。人々からは像と言われている」

「像？なんでおまえが・・・」

言葉に出来なかった。あまりにも不思議で訳が分からないから。

「Over Soul。夏唯がおまえにOver Soulを使った
らう？」

「？」

「ふむ。覚えてないのか」

不思議だ。目の前には何も無いのに
声だけが聞こえた。

「んーと、あれだ。おまえがなぜ冷静にさせたかの原因がオレだ」

「はあ？」

あまりにも友好的に話すのでキレぎみの返事をした。

「つまりだ。悩が魂と直結することで悩の一部が魂を乗っとりさせる
ことにより感情を操れるんだ」

「いや、そういうことじゃなく」

「なぜ話せるかは、今はおまえの悩が記憶を整理しているなかで夢
を見る。その夢の中では悩は少しだけ意識することで魂との会話が
成り立つ」

おいおい、こいつ話を聞かないぞ。しかも、うざい。うざくて苛々
するはずなのに苛々ない。

「夢の中だけが例外じゃない。なっ、不思議と冷静になれるだろ？」

「あっ、ああ。おまえか。おまえの能力で冷静になれたのか」

分かった。こいつのおかげであの時、冷静になれたのか。

「あっ、後、おまえの悩と魂が直結してるから、おまえの思っている
事とか分かるから」

・・・はい？マジすか。

「だから、エロい事とか考えたらすぐ分かっちゃうぞ」

・・・冷霧って男なのだろうか？

「まあ、男だ」

・・・本当に分かってやがる。

「とりあえずだ。もうすぐおまえは起きるぞ」

もう話せないって事か？

「そうだ。だが、おまえがある程度Over Soulを極めれば話せるぞ」

そうか

「あと、あまり思っただけだと喋れなくなるから声をだしながら喋れよ」

「ああ、分かった」

「じゃあな」

空間が歪む。すごいな。感覚が無くなっていく。
ふらふらになり、まるで立ちくらみで倒れたかのように意識が途切れた。

変化

光が目に入ってくる。

どうやらソファアの上に眠っていたようだ。タオルケットがかかけられている。

ソファアの上が妙に温かい。

「よっ起きたか？」

「あ？ああ」

声をする主をみる。

どこかで見た事がある黒ジャケットの男だ。

「ふじはら藤原 たく巧でよかったかな？」

思いだした何かいきなりOver Soulとか使いだした変な奴だ。

「おまえは・・・あの時の。何でおまえが？」

「何でって、連れてきたから」

「あっああ」

確かこいつに気絶させられていきなりOver Soulを入れ込んだとかいってたような気がする。

「まあ、単刀直入に言つとおまえを仲間になりたい」

「はあ」

自然とため息がでていた。

「まあ、いいよ。いきなり仲間になってくれるとは思わないしある程度説明があるよな。答えられるのは全部答えてやるよ」

「それじゃあ、ここはどこ？」「オレの家だ。詳しい住所は教えられない」

「ふーん」

「まあ、一応目隠しに耳栓してもらってある場所までに移動させてもらえるからそのあたりは大丈夫だ」

「それって危ないか」

「それにいたっては大丈夫だ。なぜ大丈夫かは教えられないが」

企業秘密ってやつか。

「ふーん。じゃあ、このグループ・・・クロウだったけ。そこにオレを仲間にさせて何がしたい？」

「よく覚えていたな」「まあ、テーブルの所に色々書いてる書物に書いてあるぞ」

「はは、いい感じの観察力だ」

「何だ？テストでもしてるのか」

「まあな。早速悪いが能力を分析している」

「ふーん」

「まあ、それより世界が四つの勢力で成り立っているのは知っているだろ。」

「あ、ああ。まあ、テレビでもあってるしな」

「そこでだ、ある一説によると世界はすでに混沌として進んでいた」

「・・・」無言で頷きながら聞く。

「表では4つの世界と言ってはいるがもうそれは偽りの事であり真実は世界はもう混沌と化し進んでいた」

「は、はあ」

啞然とした。そもそも混沌って何だ？

「狂喜の伝染。バーサーカー現象の異様な発生率。世界の生命活動の危機。分かるか？この意味？」

「いや、全然。そもそも混沌って何だ？」

「生命の停止。つまり、生きていくための最低限の活動ができなくなることの略称だ」

「つまり、生きられなくなるんだろ？」

「そうだ。水は渴き、森は枯れ、食物はとれなくなる。まさしく世界の終わりだな」

啞然とした。まさか世界にこんな事が起こっているなんて・・・

それから、色々と話し合った。

今、分かる事は世界は終わりを告げようとしていること。一般人は Over soul を知らない。才能がないものは狂喜にかかりやすくなるため。

実際、オレの目の前の人もその一人。

「なあ、名前は？」

「相川夏唯だ」

それからオレの人生は急激な変化をして変わろうとしていた。

設定資料Oversoul（前書き）

これは読んでも読まなくてもいいものです。物語をより分かりやすく書いたものです。

設定資料Oversoul

Oversoul

魂の力を一時的に借りて己を強化する方法。

1番簡単で1番危ないと言われる。

Oversoulの時間、いわゆるOverTimeを越えるとバーサーカー現象という症状になる。

バーサーカー現象は魂が肉体を乗っ取る状態の事で強い魂ほどOverTimeが短くなる。

バーサーカー現象の時間が長く続けば魂は肉体を乗っ取られる。

主に肉食動物、人間の魂が強い傾向になっている。

このためOversoulは危ないと言われている。

SoulWeapon

Oversoulの派生技。魂を具現にする事。主に火、水、土、雷、光、闇の属性に別れている。時に特殊な属性もある。使い方は様々。手から火を出したり氷をつくり刀にしたり出来る。能力者のセンス、創造力によって無限大に強くなる。

SoulBreaker

魂を相手の体内にいれ込む事。

あまりに難しいため、誰ひとりと使う事が出来ない。精神↓意識↓魂↓肉体↓命と極める度に技を扱う事が出来る。

最初は苛々と冷静と感情的な部分で軽いが極めると眠くなったり怠くなったりと悩に意識させるようにできる。だが、対象相手にSoulBreakerを意識されると出来なくなる。

さらに極めると魂をいれ込む事ができ肉体的の行動がしにくくなったり壊したりする事もできる。最終的には相手の魂の寿命を減らし

たり、吹っ飛ばす事ができる。

昔は5、6人といったらしいが詳細は分からない。
現在はひとりもないと、いわれてる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8834a/>

OverSoulWorld

2011年1月9日14時40分発行